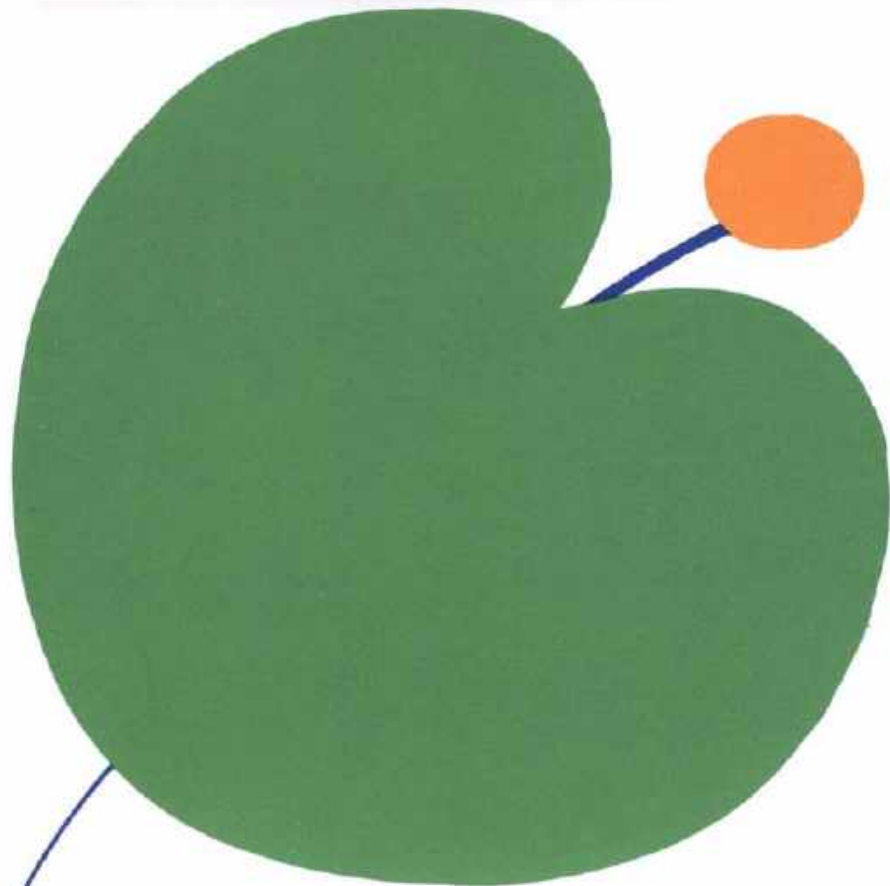


働く若人の将来

新刊
12



青少年の職業生活設計のために

労働省・婦人少年局



働く若人の将来

青少年の職業生活設計のために

は じ め に

中学校を終え、職業生活に入られた皆さん。

職業人、社会人として若い皆さんが将来に向かって力強く生きている姿は美しく素晴らしいものです。

日本の将来にとって皆さんが正しく成長して行く力が大切なことは言うまでもありません。しかし世間の荒波や日々の苦しさにとまると将来の目標を見失ないがちになる時も多いかもしれません。そういう時にもう一度、皆さんが今置かれている立場を見なおして日々のことを考えると同時に将来のことを考えてみる必要があると思います。

労働省婦人少年局は働く若人の皆さんの労働条件や福祉のための仕事をしている役所ですが、皆さんに職業や生活の将来について考え、良い計画を立ててもらうように、このパンフレットを作りました。

このパンフレットは第1部と第2部に分かれ、第1部には東京大学大河内一男総長、信越化学工業小坂徳三郎社長、朝日新聞入江徳郎論説委員の諸先生方が皆さんのために、

○働くことの意味、労働と余暇

○職業生活をおくる心がまえ

○これからの社会

について書いて下さいました。

第2部では実際に皆さんの先輩達が歩いて来た道を紹介してあります。これは昭和26年3月に中学校を卒業してすぐに社会に巣立った、今30歳前後の先輩の15年間の職業及び生活の成長の過程について婦人少年局が調べた「中学校卒業就業者の成長過程に関する調査」を基にしたものです。

このパンフレットを読まれて皆さんが将来のことを考え、計画を立てられるうえに役立てば幸いです。

労働省婦人少年局

目 次

第1部 働く若人への道しるべ

1 人生の道しるべ.....	4
—働くことの意味—	東京大学総長 大河内一男
2 職業上の道しるべ.....	12
—人生における幸福—	信越化学工業株式会社社長 小坂徳三郎
3 生活上の道しるべ.....	20
—働く「若い人」たちに—	朝日新聞論説委員 入江 徳郎

第2部 先輩の歩いた道

15年前の中卒者の成長過程

1 職場のなかで.....	30
(1) 最初の就職.....	30
(2) 15年後の職業.....	30
(3) 就職後の教育・訓練.....	33
(4) 転職の状況.....	35
(5) 昇進(役付).....	37
2 生活の変化.....	42
(1) 結 婚.....	42
(2) 自分の家を持つ.....	45
(3) 自営への道.....	45
3 事例紹介.....	50
A君の場合——働き乍ら学んで役付に——	
Bさんの場合——資格をとって准看護婦に——	
C君の場合——技術を高めて現場の責任者に——	
Dさんの場合——転職の経験——	
E君の場合——バス運転手をしながら家建てる——	
Fさんの場合——美容師見習から美容院経営へ——	
G君の場合——材木販売店員から独立——	
H君の場合——故郷に帰って自動車修理工に——	

第1部 働く若人への道しるべ

1 人生の道しるべ

—働くことの意味—

東京大学総長 大河内一男

労働と余暇

西洋社会の人間にとっては、長らく労働はいわば「苦痛」として受けとられていたように思われる。これは日本人からみると理解出来ないことだが、ヨーロッパでは人間にとって「苦痛」であり、労苦と骨折り、toil and trouble だと理解されていたようにみえる。したがって、この労働が人間にとって避けることが不可能だとするなら、「苦痛」である労働は出来るだけ短い方が人間にとって好ましい、こう判断されてきた。

日本人に比べて西ヨーロッパの労働者が労働時間を短縮することに異常な積極性を長らく持ち続けてきたのには、このような背景がある。時間の短縮に対して必ずしも積極的でなく、場合によっては時間の延長や残業の多いことを内心期待するというような、日本の労働者の伝統的なものの考え方とはきわめて顕著な対照をみせているといえるだろう。

このような西洋社会の人間の労働についての考え方の背景には、人生とは働かずにいる時間、換言すれば「苦痛」としての労働の行なわれることのない時間、つまり「余暇」の存在、これが人生の最も望ましい状態であり、いいかえれば、人生とは、余暇をエンジョイすることにほかならなかったとも云える。

睡眠をしばらく別とすれば、「苦痛」としての労働を出来るだけ排除する、あるいは少なくともこれを短縮し、逆に余暇を出来るだけ長く享受することがすなわち人間らしい生き方であり、人生とはこうした姿勢で行われるものだというのが、近世の西洋社会における労働階級の、ブルーカラーもホワイトカラーも含めての、共通の労働観、ないし生活観だと云っていい。

18世紀から19世紀にかけて興隆した近代科学の代表的存在としての経済学の中の賃金に関する思想も、この「苦痛」としての労働という考え方に結びついていた。すなわち労働が「苦痛」であるかぎり、また労働が人間として避けなければならない「苦痛」であるかぎり、この「苦痛」を他人に転嫁しようとするなら、その代償として賃金を支払わなければならない。こうした考え方の上に、ヨーロッパにおける賃金理論が形成されていったのである。

これに対して日本人は少なくとも戦前久しく働くことが人生であるかのように考える伝統を持ち続けてきたようにみえる。日本人は働くのが好きであるとか、あるいは刻苦精励の民族であるなどと批評されてきたのもこのためであろう。

そんな訳けだから戦前の日本では少なくとも働かない時間、その意味での余暇は、好ましくない、あるいは排撃すべきものとして考えられて来たとし、この考え方は様々な段階の学校教育の中でも、社会教育や家庭教育のなかでも、教えられてきた。

勿論、長らく日本では低い賃金が固定していた為に、労働者は、食っていくためには1時間でも長く働くことが生活上の必要事項であったことは云うまでもなく、こうした現実が、いつのまにか長く働くことが人間として当然であり、人間としての生活道義を作り上げることになってしまったのである。

いずれにしても、戦前から久しく日本人は、労働を尊重し、人生とは休まず働くことだと云うように教えられもし、考えもしてきたことは、疑う余地がない。労働についての西洋人と日本人との根本的な違いをここに見いだすことが出来る。

ところで敗戦後の日本を概観すると、以上述べたような労働についての伝統的な日本人の考え方には大きな転換がはじまっているようにみえる。特に若い日本人の生活やものの考え方のなかには、労働することにおいて人生としての価値や意味を見いだす、と云うよりは、かつての西洋社会の人間のように、労働を人間にとっての一種の「苦痛」であると考え、その回避と短縮に、積極的であり、

余暇の長からんことを人間生活にとっての好ましいことだと考え、それを志向するような労働運動がきわめて活発に展開されて来たといえるだろう。したがってその意味では、戦後の日本の、特に若い世代の労働についての考え方は、ある意味では西洋化したといえるかもしれない。

そうしたことの結果、労働は出来るだけ短かくあることが好ましい、と云う一般的な基調の上に、時間の短縮や、休日の増加や、休暇の増加等が、人間生活にとって好ましいものとして強く要望されるようになり、逆にまた、ホワイトカラーもブルーカラーも、働かないでいる時間、その意味での余暇、すなわちレジャーの存在を、人間生活にとって至上の価値あるものと考え、それをできるだけフルにエンジョイすることの中に、またその享受する技術の巧みさのなかに、人生の価値を見出だすと云うような生活態度がきわめて一般的であるといっている。

日本人の余暇利用

だが西洋人の場合と異って日本人の余暇についての考え方の中には特異な点が発見出来るだろう。何よりも気付かれるのは、現代の日本では余暇の利用がつねに集団としての余暇利用と云う形をとっている点がきわめて特徴的である。団体余暇とでも云うべきであろうか。したがって、余暇が人生にとって価値多きものだと言われながら、その余暇の享受や、利用においては、一人一人の人間の主体性や、個性や、持ち味等がほとんど埋没してしまって、余暇と云えば、すべて団体的に、これが集団として規格統一され、団体としてエンジョイされるような余暇利用の仕方しかされないことになる。余暇の中から人間の主体性は消え去るとも云えるだろう。あるいは、戦後の日本での余暇は、いわゆるレジャー産業のための余暇マーケットにはかならないとも言える。巨大余暇企業や独占観光企業の大量生産する余暇を適当な値段で買い取って、団体としてこれをエンジョイすると云うような仕方だけしか若い日本人は余暇というものを知らないと言っているのは、まことにこまったことだ。



余暇大量生産と団体的余暇利用者……

そればかりでなく、第2に、西洋人と比べてみた時、日本人の余暇の利用が我々の日常の労働生活や我々の日常の世帯の生活と結びつかない場合が多すぎると云うことである。

時間の短縮で浮いた余暇、休日の回数が増えたことによって出来上がった余暇について、西洋人の場合なら、多くはその日、その日の消費生活、世帯の中の家族との生活の中で、余暇をエンジョイすることに生き甲斐と喜びとを感じているように私には思われる。僅かばかりの余暇でもあれば、読み残しの新聞を読むとか、パイプをゆっくりくゆらすとか、また気の合った友人とバブで政治談議に1、2時間の時を楽しむとか、家族と一緒に公園を散歩をすとか、おおよそ日常茶飯の、何の変哲もない生活を、たとえ短い時間でも楽しもうと云う意味での余暇の考え方が、自然に滲透しているようにみえる。ところが日本人の場合には、自分の職場、自分の世帯、そういうものから離れて、集団として余暇を暴発させると云うような生活が余暇利用の殆んど唯一の仕方、それを当然のことと思って

いるのではないだろうか。

大型観光バスで遠出をして、日頃の生活の憂さを遠くの場所で晴らすと云うような感じがある、つまり日常生活と結びつかない、余暇利用だと言うべきだろう。まだ賃金が低く、まだ労使関係がそれほど安定していない日本では、また、住宅と言え、せいぜい団地生活、間借り、アパート生活の中で、決して快適ではありえない世帯の雰囲気、そうしたものから出来るだけ遠く離れて、余暇を瞬間的に爆発させたいと云うのが日本の場合の余暇利用の悲しむべき性格ではなかろうか。余暇と日常生活が離ればなれになったままでの利用が、今の日本の特に若い世代における余暇の特徴であるように私には思われる。

労働の意義

現代の日本では、特に若い日本人の間では、しばしば労働は「苦痛」であると理解されていることについては前に述べたが、一般に戦後の日本人の間では、労働を積極的に人間にとって「苦痛」だと云わないまでも、労働は、あるいは仕事は、ペイのため、賃金給与を得るための手段だと云うふうに割り切った考え方が一般的に強いように見える。

勿論だれも今の経済社会では、自分の労務を提供して、その対価としての賃金給与を得て生活していることに間違いないのだが、しかしそれは自分の働く生活が単に賃金給与をひとにぎり手ににぎるだけのためのものと考えることと同じ意味ではないだろう。

昔からよく「米塩の資を得るために働く」というような云いかたがあるが、この言葉は生活のために心ならずも労働を提供するというふうな響きを持っている。自分の生活にゆとりがあり、資産があるなら、働きたくないのだが、やむをえず生活のため心ならずも労働をしなければならない、そういうふうにもとれる。しかもこうした労働の考え方は、今日かなり強く、日本人の若い世代の間の雰囲気を作っていると思われる。

生活のためにやむをえない労務の提供であるから、その時間は短ければ短いほど好ましい。そう、だれもが暗黙に了解しているようにみえる。だがこうした考え方は一体正しいのだろうか。あるいはいやいや賃金のために働く、と云うことになれば働かないでいる時間が本当に自分の時間だと云うことになるかもしれない。こうしていつでも余暇の人間が今の人間類型として作りあげられるのであれば、こうした人間を前提とする限り、労働というものは、けっして正しく理解されているとはいえないことになり、その労働は単なる「苦痛」とだけしか考えられなくなってしまうだろう。

昼間何時間かの労働は僅かばかりの賃金や月給をポケットに入れるための、やむをえない犠牲であり、勤務時間が終わってから後の時間、すなわち余暇が自分にとって本当に人間としてのほんらいの時間だというふうに考えられてくる。

昼間の何時間かの労働は他人のための心ならずもの犠牲、勤務時間終了後翌日の労働の始まるまでの時間が、本当の人間としての自分自身のものだと言ふふうに、24時間を他人のための時間と自分のための時間と言ふふうに無意識に2分して考え、前者は好ましくないがひとにぎりの賃金を得るために、やむをえないというような考え方がかなり強いのが現状ではないだろうか。

しかしこうして自分の生き方を「苦痛」としての労働が行なわれる何時間と、自分にとっての人間らしい生活である余暇の何時間と言ふふうに機械的に2分出来るものなのだろうか。

そこで自分の今の社会の中での生活が何に足場を置いて支えられているかと云うことを、この際考えなおしてみる必要があるだろう。いいかえれば労働は、あるいは日々の働く生活は、たとえ自分がいやいやこれを提供するのであっても、あるいはまた、労働を苦痛だと自分で思い込んでいるかどうかにかかわりなく、日々の労働は、あるいは同じことだが職場での自分の仕事は、それによって自分が社会に繋がるパイプだと考えられるべきではないだろうか。

今の社会の人間はロビンソン・クルーソーのように1人で孤立して生活してい

る訳けではない。何百何千と云うパイプで社会と繋がりながら、社会的な人間として生存しつつ、成長をとげているのだが、その場合に1人1人の人間と、あるいは自分と、社会との繋がりが何によって保たれているかと云えば、いうまでもなく、個人個人の労働が、——勿論その労働に対して自分が好ましいとは思えないということもあるが、またそれを「苦痛」と考えるようなこともあるが——結果からみて個々の人間が社会と繋がる唯一の結び目は、個人個人の職場の労働を通してである。

工場の労働者は毎日何時間かの作業場の中での汗にまみれた労働、ホワイトカラーは事務所の中での何時間かの勤務、教師は教室での講義、学生の指導、こうした労働を通して労働者も、ホワイトカラーも、教師も、はじめて社会的な存在となるのである。

こうした仕事の繋がりのない個人は今の社会ではほとんど存在の場所を認められないということになるだろう。自分と社会との、仕事を通じての、あるいは労働を通じての繋がりの切れた代表的なものは失業ということになるだろう。

どのような職業分野の人間であれ、それと社会との繋がりは、今の経済機構のもとでは、必ず日々の労働、またはそれによって代表される自分の仕事を通してであり、それ以外に個人と社会とを結ぶ糸は今の社会では存在しない。ただそこでその結び目にあたる、労働や、自分の仕事に対する雇用の条件、賃金や働く時間の長さやその他の条件の良し悪し、それに対する意見や不満、批判等は様々であり得る訳けであるが、それにもかかわらず自分と社会とを繋ぐ糸は、あるいは個人を社会的な存在たらしめる契機は、自分自分の日々の労働、あるいは仕事だと思えるべきだろう。

こう考えれば人間としての自我というようなものも、その発現される場所は今の社会では職場での労働においては存在しない。哲学者は自我や個性は抽象的に存在しているように書いているが、事実、自我や個性と呼ばれるようなものは、今日の社会では、その人間の日々の労働や仕事を離れては存在しないと考え



自我や個性の発現は日々の労働や仕事で……

るべきである。

自分の毎日の労働や仕事の中に自分を全面的に投入することによって始めて自分が社会につらなっているという自覚、またそこで始めて自分が一人前の人間としての重要性を持つようになったという自覚は、近世に入ってから西ヨーロッパの人間の精神の成長の歴史の中に極めて鮮明にくみ取ることが出来る。近世初期のプロテスタントは毎日彼等が仕事や労働に自分を投入することの中に彼等の新しい信仰の基盤を自覚したといわれている、教会の中で宗教的に自分の信仰が天国の高みに昇華するのではなく、埃にまみれた自分の仕事場で刻苦精励し、自分の日々の労働に没入することによって、始めて人間は人間になり、神によって義とせられるのだという自覚が彼等の中に新しいエネルギーを作り出したように思われる。

宗教上の問題はさておいて、戦後の日本では、日々の仕事や労働の中に自分を人間として投入することの重要さと、それを通して始めて、自分が社会と連なるのだという自覚、同時にまたそれによって始めて社会に対して、個人としての発言と批判の精神が体得出来るという自覚、そうしたものがどれだけ根をおろしているか、私にはいささかたよりない気がしないでもない。

2 職業上の道しるべ

—人生における幸福—

信越化学工業株式会社社長 小坂徳三郎

日本の産業界は、毎年百万人からの若い人びとを迎え入れています。毎年それだけ、日本の産業界は、諸君のような若い人によって若返りをしているわけです。ということは、若い諸君は日本の産業の将来に対して、さらにいえば日本の国や社会、国民全体の将来に対して、非常に大きな責任を負っている、ということです。

このことは諸君が、自分の仕事に対してどんな考え方、どんな態度で取り組むかということが、日本の社会を良くもするだろうし悪くもするかも知れない、ということであり、また、そのことが、日本中の人びとがより幸福で豊かな生活ができるか、それとも、みじめで貧しい生活しかできなくなるか、ということにも影響してゆく、ということにもなるわけです。

また、仕事に対する諸君の取り組み方は、諸君自身の人生を、充実した生きがいのあるものにするか、あるいはだらけた、つまらないものにするか、ということさえ決めることになるでしょう。諸君の人生の幸福が、職業に対する諸君自身の考え方や態度によって決まる、ということです。

人生の幸福の三つの条件

スイスの国際法の大家であり、政治家であり、さらに偉大な思想家でもあるカール・ヒルティという人が、人間が人間らしく幸福であるための条件として三つのことをあげています。その第一の条件は、よい職業につくことで、あとの二つは、よい結婚をすること、人生に課題をもつことだ、といっています。

さて「よい職業につく」ということは、いったいどういうことか。たとえば、この世の中には、よい職業とよくない職業があるから、その中からよい職業を選

べ、ということなのか。あるいは、そもそも「よい職業」とはどういう職業のことをいうのか。収入のいい職業とか、地位の昇進の早い職業とかがよい職業なのか、あるいはまた、よい職業につくということと、よい会社に入社するということとは同じことなのか——ひとつ、諸君自身で考えてみて下さい。また、諸君の大部分は、すでに何らかの職業についておられるでしょうから、君が、どんな考えでいまの職業を選んだかを、思い出してみることもいいでしょう。

ユメを大きく描こう

先年、国立教育研究所が、中学や高校、大学を卒業して産業界に入った若い人びとの意識調査というのをやりました。その調査によると、これらの若い人びと、すなわち諸君の先輩たちは、非常にまじめで、きわめて前向きな考え方をしており、積極的である一方、権利意識が強く、自己中心的な考え方が強い。それだけに自負心が強い。会社での昇進や給料については、実力主義がいいと考えている。生活の面ではいわゆる小市民的な生活を望んでいるということです。

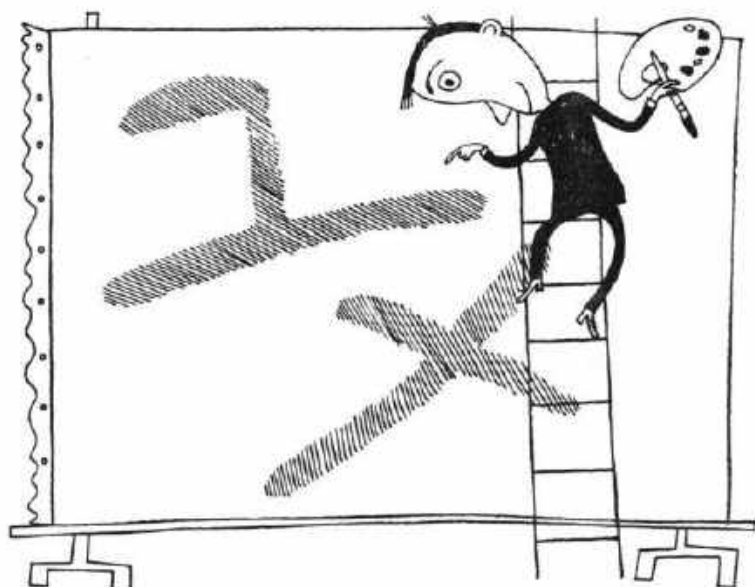
私は、この調査から会社を経営する立ち場の者として、多くのことを反省もし、また諸君のような若い人びとに対する会社としての配慮のし方についても多くのことを考えさせられました。

それを一言でいうと、よく年輩の人たちのいう「最近の若い者は……」といった、若い人に批判的な感覚は、相当に考え直す必要があるし、また若い人たちの意識、物の考え方に、十分な理解をもった配慮が必要だ——ということです。

しかし一方、若い人びとに対する、年輩者たちの批判が、必ずしも不当なものばかりとはいえないのではないかと、ということも感じたわけです。

たとえば、「最近の若い人びとにはユメがない」といわれます。この調査でも、きれいな奥さんと郊外のしゃれた家に住み、休日には家族と自家用車でドライブにゆく、といった、いわゆる小市民的な生活が人生のユメだ、という若い人が多い、という結果が出ています。

もちろん、そうした生活を望むことがいけないことだということではありません



若人よ！ 人生の大きなユメを描こう……

が、これからの新しい時代を背負う若い人のユメが、そんな程度のものでしかないとしたら、これはいささか情ない気がします。

この程度のことは、人生のユメというべきほどのものではないと、私は思うのです。

人生のユメというものは、いろいろの困難にもめげず、これを乗り越えてゆく努力の目標になり、またどんな未経験の問題にぶつかっても、これを自ら解決してゆく意欲の原動力になるものだ、と私は思います。ですから、このユメは、「大志」といってもいいし「野心」といってもいい。ヒルティ流にいうならば、そういうものこそが「人生の課題」であろうと思うのです。

そこで私はまず諸君に、ユメをもとり、と申し上げたい。

若い人びとがユメをもてないということには、それなりに社会的な複雑な背景があることは事実でしょう。しかし、むしろそれだからこそ、私は、諸君自らの決意として、大きなユメを描こうではないか、と申し上げたいのです。

そこで、その『大きなユメ』を、諸君自身としてどのように描いたらいいか、ということ、ここで考えてみて下さい。

『価値』をつくり出す

さて、私としては、ユメや大志をもった職業人、産業人であるために重要なこととして、三つのことを申し上げたいと思います。

価値をつくり出す 第1に、諸君はそれぞれの職場で、社会的に『価値』をつくり出すという崇高な使命をになっているのだ、ということです。

物をつくる生産の仕事についている人も、これを消費者に届ける販売や流通の仕事をする人も、また、いわゆるサービス業務にたずさわる人も、いずれもそれぞれの職場で、社会の人びとに何らかの役に立つ仕事を分担し合っているわけです。『役に立つ』、ということ、いいかえれば『価値』をつくり出し社会の人びとにこれを提供してゆくということが諸君の仕事の基本的な使命であり、目標であるわけです。

どんなに小さい仕事でも能率よく進めてゆく、そして社会的な価値を少しでも大きくつくり出してゆく、という努力が、人びとみんなで、その価値を分け合えるような、豊かな社会をつくってゆくのだ、ということです。

どうでしょう、君がいま働いている職場や仕事が、どのように社会の人びと、そして自分の幸福につながっているか。またどのようにしたら、もっと大きく役立つ仕事にできるか。そういうことを、ここであらためて考えてみて下さい。

リーダーを育ててゆこう 第2は、このように尊い使命をもち、社会的に大きな勢力としても成長しつつある産業人のグループの中に、良識と勇気をもった正しいリーダーを育ててゆこうではないか、ということです。

ともすると、合理的に、誠実な話し合いによって共通の進歩の道を見つけ出そうとする努力を、何か弱々しいことのように考える傾向があります。リーダーといえ、いつも強硬な意見をいい、人びとを強引にひっぱってゆく人でないと、

それは『ダラ幹。だとみがちです。

これは大へんな間違いだと私は思います。また、こうしたことを放っておくことは、大へん無責任だと思います。

リーダーには、確かに強い意志の力、大きな人間的な魅力が必要です。しかも、真のリーダーは、責任をとることを恐れ、これを回避しようとする者の中から生まれません。リーダーは、良識をもち、正しい勇気をもって責任をとれる者の中から選び出され、育てゆくものです。

われわれが社会的に価値をつくり出し、社会に役立つ活動をしてゆくためには、そこに合理的な秩序がなければなりません。秩序ある進歩によって、日本中の人びとの幸福を増進してゆくためには、良識に基づいた正しい勇気あるリーダーが必要です。

そこで私は、若い諸君に、われわれの仲間、会社、地域社会など、産業界や社会のあらゆる分野の良識ある人びとの中から、真のリーダーを育てよう、と提案したいのです。

まっすぐに歩こう 3番目に申しあげたいことは、これはお説教じみて恐縮ですが、「つねに、まっすぐ歩こう」ということです。

人生には、日の当たるときも、日かげにたたまなければならぬときもあります。人はだれでも、日の当たる場所を歩きたいものですが、しかし、人間に対する評価というものは、背後から遠く静かに見つめている目があるものです。日のあたるところだけを要領よく歩いている人は、背後からじっとみつめている目には、たのもしく信頼できる人だとはうつらないでしょう。

日のあたる場所であろうと、日かげの暗い場所であろうと、じっくりとまっすぐに進む人こそが、誠実な人として信頼される人であり、また、日かげにあっても、人生の大きなユメをもち、じっくりと努力してゆく人こそが、多くの困難を乗り越え、与えられた使命、自らの人生の課題を立派に果たせる能力と人格を高めてゆけるのだし、また、そのように自ら鍛えあげた能力と人格とが、人生のユ

メをより大きくし、それを実現させてゆくのだと思います。

真のリーダーの資格は、そのように、つねに自分の目標に向かってまっすぐに歩く勇気を持ち、大きなユメの実現に向かってたゆまず努力してゆくことだと思います。それがまた、大ぜいの人びとをひきつけてゆくことになるわけです。

君自身はどう考えたか

さて、ここまで読んでこられた君には、私がこの文章の初めの方で、よい職業について考えてみて下さいとお願いしたいいくつかの問題の答が、だいぶはっきりした形で出てきたのではないのでしょうか。

よい職業につく、ということとは、この世の中によい職業とかよくない職業とかの区別があるのではなく、ヒルティ流にいえば、それは要するに、職業を通じて人生の課題を追求し、これをなしとげてゆく、ということであって、結局は、自分が、自分の職業についてどういう考え方、どういう態度で取り組むか、という心がまえ、むずかしくいえば、君自身の「職業観」をしっかりともつことが大切なのだ、ということになります。

私は、もし君の答がこのような意味のものであったら、君はもう、人生の幸福の三つの条件のうち、「よい職業」と「人生の課題」という二つの条件をもつことができたはずだと思います。

と同時に、君はきっと、仕事のきびしさということについても、正しい認識をもつことができたであろうと思います。

仕事はつらいもの、生活を維持するための手段として、つらくともがまんしなければならないもの、という考え方をする人もありますが、君はたぶん、決してそんなものではないのだ、もっともっと人生にとって大事なものだ、それだけにきびしいものだが、そのきびしさを一つ一つ乗り越えて、自分のユメを実現してゆくことにこそ、本当の喜び、本当の幸福があるのだ、と考えておられると思います。

もっとも、きびしいといい、崇高なものだといっても、仕事というものは、そこに自分なりのテーマ（課題）をもち、目標をもち、ユメを描いて取り組むと、本当は楽しいものです。うちに大きなユメを描きながら、ゆとりをもって、これは直すべきだ、こうした方がいいと思うことは、どしどし発言してゆく気持ちで取り組むとき、仕事は充実した楽しさを感じさせ、職場の同僚や上司の人びととも愉快にやってくれるものです。

まとめていいましょう。まず、君は自分の職業についてテーマをもち、使命感と誇りをもって仕事を受すること、そしてその上に、良識と勇気をもって責任ある決断のできる力を養うこと、とらわれない新鮮な感覚をもって勉強を続けること——が、君の職業を「良い職業」にするわけです。

諸君は弾力的な適応性を豊かにもつ若人なのだから、仕事に必要な知識や技能は、実際に仕事に取り組みながら、自ら身につけ、向上させてゆけるに違いないと信じます。

仕事も家庭も生活のうち

諸君はもう、人生の幸福の三条件のうち、二つをもつことができたはずで、残る条件は「よい結婚」ということです。



不満を持って帰ってはせっかくの奥さんの真心も……！

『マイホーム主義』とか『家庭中心主義』とかいうことが、よくいわれます。そしてそれは多くの場合、仕事より家庭を大切に考える、仕事や職場のことは適当にやって、自分の個人的な生活を大事にする、という意味でいわれているようです。諸君は、これをどう考えるでしょうか。

私は、そして私の知る限りの若い産業人の多くの諸君は、これをとても不思議なことだと感じています。

というのは、第一に、仕事もわれわれの生活であり、人生の課題を追求する場であり、家庭や個人的な生活とは全く別の『生活ではないもの。ではないはずで

す。そんな理屈はともかくとしても、たとえば、一日の仕事を満足に果たせないで家に帰って、どうして家庭生活だけを愉快にやれるか——。仕事をしている時間が充実していなかったら、心のどこかに、自分ではそうと気づかないとしても、きつと不満が残るはずで

す。その不満が、何かの拍子に出てきて、さびしくなったり、イライラしたりすることになるかも知れないはずで

す。一日の仕事を果たし終えて、充実した気持で家に帰る、そういうことができこそ、家庭生活も心おきなく愉快に送れるというものでしょう。少なくとも私はそう思います。

ヒルティのあげた「よい結婚」という条件が、よい家庭を築く、よい家庭生活を送る、という意味だとしたら、産業人である君にとって、やはり自分の仕事に対してしっかりとした職業観をもち、心ゆくまで仕事を完全に果たしてこそ、第三番目の幸福の条件をもつことができる、ということになるわけです。

また逆に、よい家庭生活、よい個人生活がうしろだてになって、仕事の方もさらに、はりきってやれる、ということになります。

職場の生活も、家庭での生活も、結局は1人の君自身の生活であるわけです。仕事と家庭とは別だ、と考えることは、本当は現実的な考え方ではないということです。

われわれは1人1人、社会的にも個人的にも崇高な使命のもとに、それぞれに大切な役割りをもった人間どうしです。自分は何をなすべきかという課題を、じっくりと考え、見定めて、そこに大きなユメを描いてゆくとき、強い自信と誇りがもてます。そうした考え方、気持が1人1人の胸の中でふくらみ、芽を出してゆけば、われわれの人生も、日本の社会も、明るく豊かに築かれてゆくだろうと、私は信じています。

3 生活上の道しるべ

一働く「若い人」たちに一

朝日新聞論説委員 入江 徳郎

若い大工の仕事ぶり

家を少し改築した。戦後から住んだ家だが、戦時中の資材の乏しい時代につくられたとみえて、痛み方がはげしい。離れの方などは老朽住宅と化してしまった。

やむなく改築にかかった。知人の紹介で、ある住宅建設業者に頼み、そこから毎日、大工がやってきた。

気がついたのはその大工の働きぶりである。中に20歳くらいの兄弟の大工がいたが、じつによく働いた。おりから真夏だったが、2人とも流れる汗をふりとばして、わき目もふらずに仕事をしていた。

人間の働く姿は何にもまして美しいものだが、若い兄弟の働く姿は印象的だった。兄は東北地方で中学を出て、東京に出て大工の修業をし、弟もつづいて上京してきたという。つぎの仕事をひかえているので、1日も早く私の家の仕事を片付けてしまうつもりらしい。ものを言うヒマを惜しむくらいに頑張っていた。

大工の仕事が終って、あとは左官や塗装の手に移るとき、兄弟は出来あがった棟を見上げ、兄の方が弟に何やら説明していた。

家内の話によると、工事の大切なところは兄がやり、よく弟に教えていたそうである。ならんで指さしたり、地面になにか書きながら仕上った家について研究している2人の姿は、ほほえましく、気持のよいものだった。

以前は、ノロノロと仕事をひきのばすような職人がいて、家をたてたり修繕したりする時に、まだるこくってやりきれぬという声をよく聞いたものだ。寒いころだと、大工はまず焚火をはじめ、なかなか腰をあげない。やっと少し仕事をし

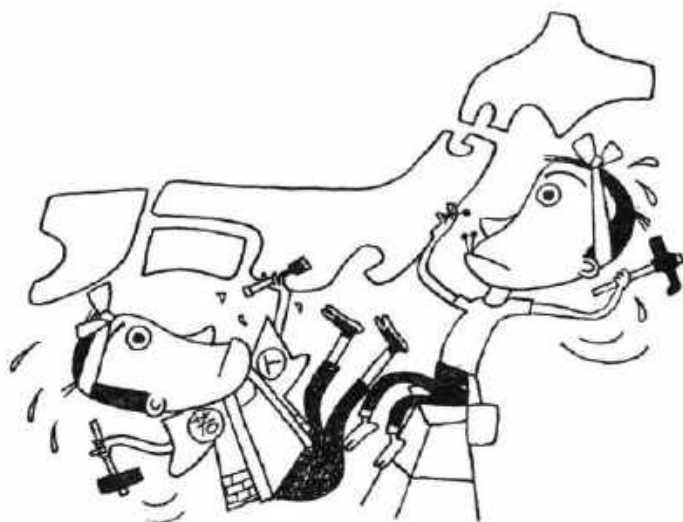
たかと思うとすぐ10時ごろになる。

はげしい労働だから、職人には10時と3時にお茶を出す習慣があるが、10時のお茶をゆっくり飲んで、仲間同士で雑談をはじめる。しばらくして仕事にかかる間もなく昼食、といったぐあいで、工事ははかどらず、日当かせぎにわざとユックリしているのではないかといいたくなる場合がよくあったものだ。

いまは違うようである。この兄弟の仕事ぶりの中に、私は職人氣質の変革を見た。休憩時間もキチンとして、ダラダラしない。ビジネスライクである。何日までにどの箇所を仕上げると通告すると、その通りに工事を進行させる。昔のような気分屋のやり方ではない。

時勢が変わってきて、職人の気質も変ぼうしているのであろう。建設業者はひっぱりだこで、次から次に仕事が待っている。ひとつの仕事にノンビリとかかっではいられない。能率のよい仕事を要求される。若い職人の中には、古い職人氣質を打ち破ってゆく技能者精神が旺盛になっているのではあるまいか、と考えた。

そのころ、あるマスコミから「ひと口でいえば」という注釈つきで「現代のニ



日本の伸びる力は若い人の真剣な勤労から……

リートとは？」というアンケートを受けた。私は「それは職人だ。大学卒業生ではなくなった」と答えた。

日本をささえている大きな力は、手に職をもち、技能を身につけ、真剣に働いている若者たちである。夏休みだ冬休みだと、遊ぶことの方に熱心なレジャー型の大学生などではない。若い大工の昇命の働きぶりなどは、なまけものでダレた大学生に見せてやりたいくらいである。

若い人の真剣な勤労を見て、私は日本の伸びる力がここにあるような気がした。家内も感心してこの兄弟に、「こっちの方に来たらずひ寄っていらっしゃい」と、しきりにお礼を言っていた。よほど忙がしいのであろう。その後兄弟は姿を現わさない。どこかの工事場で、ツチと共に汗をふり飛ばして頑張っていることであらう。

学歴偏重から能力主義へ

世の中にはバカげたことが多いが、いまの日本でバカバカしさのトップクラスにはいるのは「大学進学病」である。

メッタヤタラと、親たちは子どもを大学にやりたがり、小学生のときから「進学、進学。でシリをひっぱたく。中学にはいれば高校へ、高校では大学をめざして、ものすごい受験用の勉強が強いられる。

子どもこそいい迷惑である。勉強が好きな子ばかりではない。大学進学ばかりが子どもの希望ではないが、親たちの誤った教育熱心は、ともかくも子どもを大学にはいらせ、「学問」よりは、大学卒の「学歴」を手に入れさせようとする。「大学卒」の履歴書こそは、子どもがこれからの社会を生きてゆく上の「優待券」と思いこんでいる。

教育ママや周囲のフンイキにまきこまれ、こどもは馬車ウマのように、進学のための勉強をやらされる。これは勉強というよりは「受験技術」といった方がよい。

大学もたいへんな数だ。日本だけでヨーロッパ全体と同じくらいあるという。毎年、卒業証書を手にした多数の「大学卒」が大量生産される。

だが、これらの大学卒業者が、学歴だけで世の中をなんとか渡ってゆけると思ったら大間違いだ。第一に大学生が多すぎる。明治が大正のころのように、「学生様なら娘をやろうか」といった稀少価値のある時代ではない。

学問が好きで、探究のために大学に進む学生もあるが、その数はそんなに多くはあるまい。大学を出ておけば就職に都合がよいから、という学生が圧倒的に多数だ。

われもわれもとサラリーマンになる。しかし、就職したからといって、安穩な生活が保証される時代ではない。「サラリーマンは気楽な稼業ときたもんだ」といったのもつい最近のようで、じつは『昔の夢』である。資本の自由化で国際間のきびしい企業競争にはいった日本では、大過なく勤めていれば、年功序列、終身雇傭で、収入がだんだんふえるような気楽さは一掃されつつある。いまの日本はいろんな分野でめまぐるしい変革が進行しているが、サラリーマンの世界も例外ではない。

「大学卒」の履歴は、社会の優待乗車券ではない。年功序列の賃金は職能給に変わり、能力のないもの、努力しないものは容赦なく落伍させられる。そういう時代である。

中学を卒業しただけで、あるいは高校卒だけで、社会に出て働く人の中にはじぶんも大学に行きたかった、と残念な思いをした人も多だろう。

しかし、大学に進むことが人生の幸せとはいえない。空虚な学生生活で青春を浪費し、しがたいサラリーマンになるよりも、早く社会に出て、技能を身につけた方が、より充実した一生を送ることができよう。これからは、「学歴」ではなく、本人の「能力」がモノをいう時代である。

学歴偏重は、明治いらいつづいた日本の弊風だった。教育が盛んになったのはよいことだが、それとともに内容を忘れて形の上の「学歴」だけで人を判定する

「学歴万能」が生れた。

この弊風がいよいよひろがったのは、戦後もここ10年間で、その現れが「教育ママ」の大量発生だ。

人間をつくる大切な時期に、受験技術ばかり強いられる環境からは、のびのびして豊かな人間性をそなえた人物は育ちにくい。競争心のみ強く、他人より1点でも多くとり、成績がよければ人を見くだし、独善的で高慢な性格をつくりやすい。

こうした型の人間がやたらにふえそうだと案じられた矢先、資本の自由化で、日本の企業が、学歴偏重を捨て、実力主義に転換しなければならなくなったことは、天の摂理といってよい。

もしも、この変革が訪れなかったら、20年、30年先の日本は、不親切で、利己的でいやな型の人物が各界にやたらにふえ、不愉快きわまる社会になるに違いない。

社会の進歩は川の流れに似ている。ゆっくりしているようだが、ある時点にさしかかると、滝となり、急流となり、それまでのゆるい流れは突如としてテンポを速める。

現代はその急流がはじまっている。原動力は世界的なイノベーション（技術革新）だ。ロケットが動く月に正確に着陸し、人類が月をふむ日も近い。大型ジェット機は世界の距離を国内旅行程度に縮める。

われわれは激しい変革の時代に生きている。それは仕事に受身でなく、また、視野をひろく持つ人が、進歩のにない手になる時代ということであろう。

明日をきざくのは、各分野での努力と探究の心がまえてあって、1枚の卒業証書ではない。

未来について考えよう

諸君は10年先、20年先の世界や日本や自分のことを何回か想像してみたことがあるだろう。



設計を持たない生き方は予定もない旅と同じ……

生活が忙がしくて、そんなのんきなことはやっていないというかもしれない。

また、想像するといっても、雲をつかむような話で、10年先にはどうなるか、とてもわからないという人があるかもしれない。

わたくしは10年先を考えるようにしたまえと若い人におすすめしたい。つかみどころのないような未来だが、どうなるだろうかと考えるだけでも有意義だ、そしてあれこれ考えるうちに「未来」は少しずつ明確な形をとってくる。それが諸君の「未来図」であり、その中に自分自身の位置をはめこんだものが自己のビジョンだ。

未来を考えることのできない人は、年は若くても精神的には老人なのである。若さの特権は未来をえがき、つくり出しうることだ。

未来図をあれこれと描き、ビジョンを持つがよい。それだけで、しっかり勉強しようとする姿勢が生れる。

現在をなまけ、精神的な「その日暮らし」をしていることは大きな損失だと気がつく、眼前だけを見て、未来を考えない人はとかくあさはかな享楽主義に陥って、あとで後悔することが多い。これだけめまぐるしい変革と進歩の時代に生れ合わせながら、ついぞ未来も考えないとはもったいない話である。

未来を考える人には、おのずから人生の長期設計が生れる。設計を持たないで生きてゆくことははじめから予定もない旅のようなものである。むろん、人生の旅は設計どおりにゆかぬが、ゆかなくてもよい、じぶんの設計図をもって現実と戦うことと、何の設計図もなく、計画もなく、風のまにまに流される生活との間には大きな差がある。自分の主人公として自主性を持った生き方にくらべて、風のまにまに流される生き方は、風船のごとくたよりない。

3年計画や、5年計画をたて、あるいは今年中にこれだけはやると目標をたてることもよい。知識や実技を習得するために、その間、うちこんで精進することは習得だけでなく、人間を磨くことにもなる。後になって必らず「頑張ってよかった」と思うものだ。

未来の構図、長期設計を考える時、その中に結婚の問題があくまれるだろう。それは未来図の中でも、バラ色のゾーンである。

健康で明るくて、いっしょに生きてゆくことが楽しくなるような女性を探したまえ。女性の方でも、男らしく、頼母しい男性を探し求めているのである。未来に向かって考え、努力しているような青年ならきっとよき伴侶が得られるだろう。

失恋することがあるかもしれないが、それもまた人生である。人生とは、経験の積み重ねであり、失敗の連続の中から立ちあがる歴史でもある。失敗つづきで心が滅入りがちな時は、じゅもんのように次の言葉を唱えるがよい。

太陽は明日もまた昇る！。

じつはこれは私がずいぶんと唱えたじゅもんである。全力をつくしたのに、仕事がうまくゆかず、じぶんの非力に情けなくなる時がしばしばある。

そんなとき私は「あすこそは」と思うことにしている。失敗はにがく苦しい。

だがさいわいなことに、明日という日がある。太陽は変りなく輝き、何度でもやり直せとまた1日を恵んでくれる。明日というものがあるかぎり、絶望する必要はない。絶望という文字を私たちの辞書から消そう。

さらにもうひとつ消したいものがある。それは「どうせ、なるようにしかならぬ」という文句だ。この言葉に敗けると、他愛もなく人間は押し流されてしまう。思うようにならず、疲れてくるとついこの言葉が出やすい。自分が耐えている時でも、友人がもらすのを聞き、おれひとりじゃないと思うと、安心して気がくじけ「どうせ、なるようにしか……」と共鳴しがちなこともある。

若さとは、「明日がある！」という前進と「どうせなるようにしか……」の後退との戦いの時期である。諸君の心の中で、この2つが綱引きして、どちらが勝っているか。もしも「どうせ……」の方の傾向が強いとしたら、それは赤信号だ。明日を失うとしたいに自分さえも見失う。「どうせ……」とつぶやきたくなったら、そこで胸をドンと張って「あしただ！ あしただ！」と大声で叫んで見ないか。

「若い人」はこの戦いに決して敗けてはならぬ。また、敗けるはずもないのである。

第2部 先輩の歩いた道

15年前の中卒者の成長過程

皆さんが将来の長期人生設計をたてる際に、皆さんの先輩たちがどのような道を歩んだかを知ることにも参考になるでしょう。

婦人少年局では、昭和41年8月に、15年前に中学校を卒業してすぐに社会へ巣立った少年・少女がその後どのような職業や生活の変化を経験したかを調査しました。

調査対象になったかつての少年・少女も、調査時には年令30～31歳に達し、今や社会の中堅層となっています。そしてその職業も生活も大きく成長していました。

以下は、調査結果に表われた、先輩たちの15年間の足どりです。

1 職 場 の な か で

調査対象となった先輩たち2,004名の職場の中での歩みは次の通りです。

(1) 最初の就職

中卒後はじめて職業についた時の状態は、雇用者（勤めて給料をもらう人）になった人が大多数でしたが家族従業者（家で農業や商業などを手伝う人）になった人も少いました。

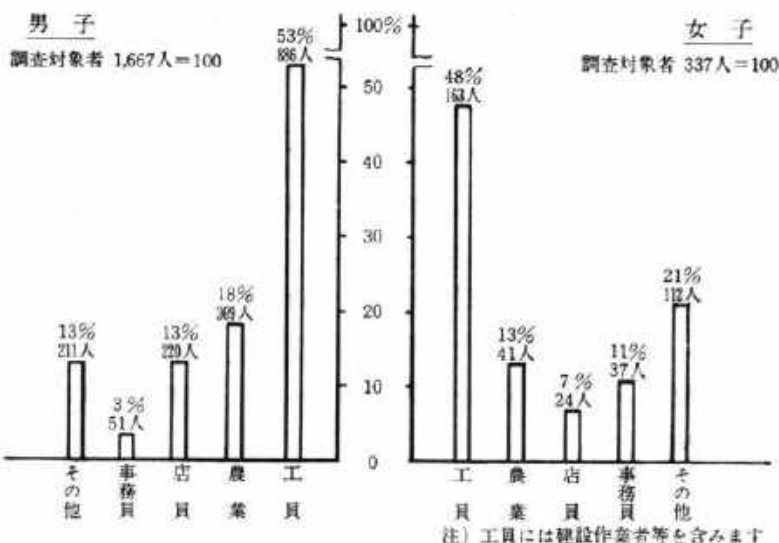
これらの人の職業をみると約半数の人が工員になり、ついで農業、店員、事務員の順になっていました（第1図）。

(2) 15年後の職業

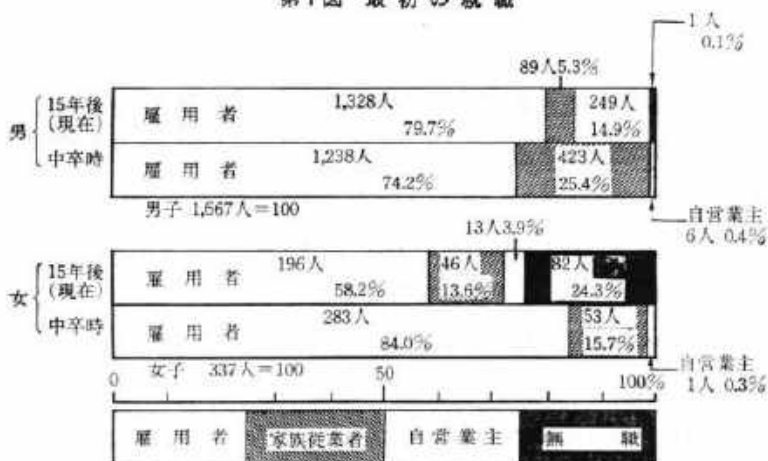
就職後15年を経て、先輩たちが現在どんな職業についているかをみると次の通りです。

女子については、無職になった人が相当いますが、これは結婚して家庭に入った人達です。男子については家業を手伝う人が減って、大部分は勤め人で自営業主になっている人もありました（第2図）。

では先輩たちの現在の職業を中卒当時とくらべながらみてみましょう。



第1図 最初の就職



第2図 従業上の地位の変化

○工 員 (建設作業者等を含む)

やはり職種で多いのは工員ですが、これをさらに詳しくみてみるといくつかの特徴があります。

男子において、最も多いのは鋳物工、プレス工、溶接工など金属材料や金属製品の製造工で、中卒当時より増えました。反対にパン・ビスケット類や和菓子等の製造をはじめとする飲食料品の製造工は中卒当初のだいたい半数近くに減ってしまいました。また人数は少ないのですが、ボイラーマン、起重機、コンプレッサー運転士等の資格職種につく人が増えたのが目を引きます。女子においては紡績関係の工員が大幅に減少しました。

○運転手等（その他の運輸・通信従事者を含む）

15年間で、男子の職種として一番伸びたのが運転手（乗用、貨物、バスその他）等の職種で、運転免許をとって運転手になった人が調査した2,000人のうち200名近くありました。

○販 売（店主、店員、外交員等）

中卒当時男女あわせて200名以上いた店員が、15年間にちょうど半分に減って、店主や外交員が増えました。

○事 務

中卒当時30名を数えた事務補助員は現在わずか1名を残すだけとなって、一般事務員や会計事務員がほとんどとなりました。

○農 林 業

農業従事者は15年間に大幅に減少しました。とくに男子は中卒時の300余名から15年後には70余名とへり、前に見た家族従業者の減少とあわせてみると、農家の子弟が町へ出て労働者になったことがわかります。

○サービス職種

理・美容師やクリーニング師の試験をとおり、1人前の職人になった人が男子約30名、女子約10名ほどありました。

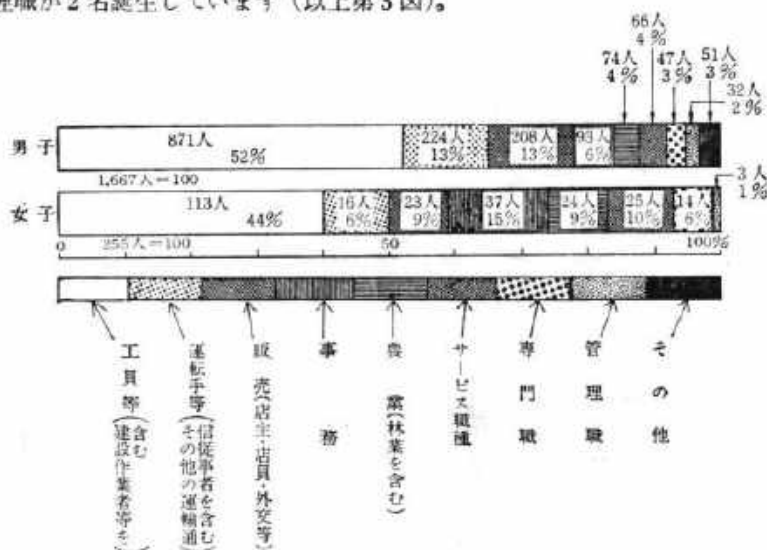
○専 門 職

これは非常に高い知識や技術、あるいは資格が必要な職業ですが、この職業についた人もできました。男子では機械・電気・鉱山・土木建築等の技術者が約30

名誕生し、女子は看護婦・准看護婦の資格取得者が7名、またわずか1名ずつですが、小学校・中学校の先生になった人もありました。

○管 理 職

男子には会社や団体の役員になった人があり、女子はわずかですが地方公務の管理職が2名誕生しています（以上第3図）。



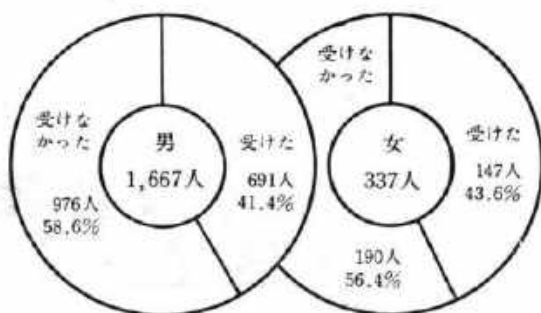
第3図 15年後の職業

(3) 就職後の教育、訓練

中学を出て15年たった先輩たちの職業は、中卒より高い資格や技術を必要とする水準の高いものもみられるようになりました。

就職後にうけた教育、訓練の状況をみると、先輩たちのうち10人中4人までが就職後何らかの教育、訓練（ここでは継続1カ月以上あるいは延日数30日以上のものでのみをみました）を受けていました。男子は定時制高校や通信制高校へ働きながら進んだ人が多く、そのうち高校卒業後大学まで進んだ人もありました。また、勤め先の事業所が行なった事業内職業訓練や、公共職業訓練所の行な

う職業訓練を受けた人もかなりありました。一方、女子は定時制高校や職業訓練を受けた人は少なく、各種学校（洋裁、編物、技芸等の学校）へ行った人が多くなっていました（第4図）。



男子

高校 346人 42.8% (定時制 309人 通信制 31人 全日制 6人)	大学 32人 職業訓練 195人 24.1% (事業内 153人 公共 32人)	各種学校 83人 10.3%	社会教育 80人 9.9%	その他 104人 12.9%
--	---	----------------	---------------	----------------

男子 種目総数=808=100

女子

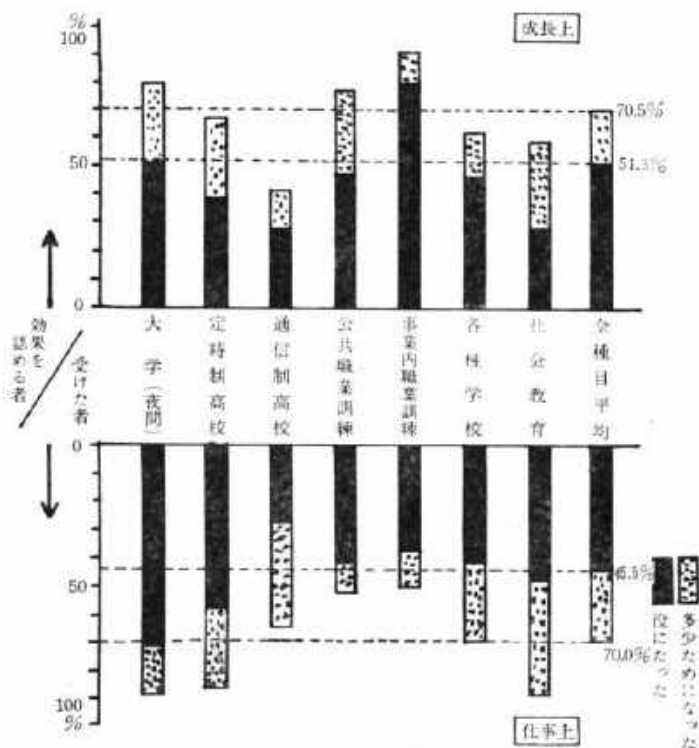
高校 22人 11.5% (定時制 16人 通信制 3人 全日制 1人)	職業訓練 22人 11.5% (事業内 18人 公共 4人)	各種学校 103人 53.9%	社会教育 12人 6.3%	その他 32人 16.8%
---	--------------------------------------	-----------------	---------------	---------------

女子 種目総数=191=100

第4図 教育訓練の習得状況

教育、訓練を受けた先輩たちの多くは受けた教育、訓練が役に立ったと認めています。

教育、訓練の効果があつたと思うかどうかを「仕事の上で」と「人間としての成長の上で」の二面からたずねたところ、だいたい大ざっぱにいて約70%の人がその両面で効果があつたと答えています（第5図）。



第5図 受けた教育・訓練の効果

（4） 転職の状況

最近よく人手不足の時代になったといわれます。ことに若い人の場合は、年々進学率が上昇し就職する人が少なくなるのにひきかえ、企業の側では技術の進歩に伴ってそれほど熟練を必要としない職種が増え、年配者よりも若くて順応性の高い働き手を欲しがる傾向がでてきました。それで若い人の場合は、会社から

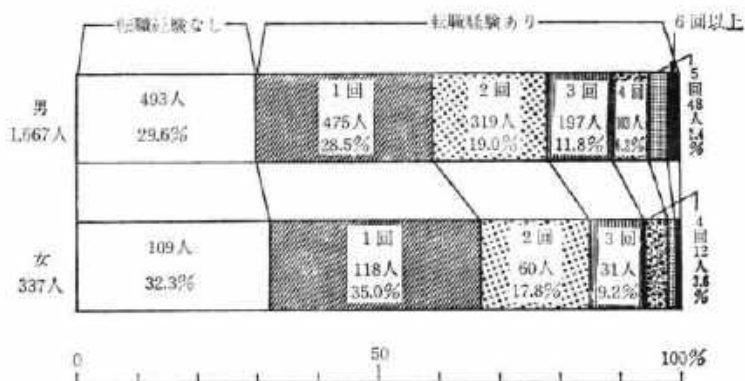
引っぱりだこです。このような企業の側にとっての求人難は、働く者にとっては働き口が豊富にあることを意味し、それだけ条件の好いところを選ぶ機会が広がったことになります。しかし、そのため考えのない衝動的な転職が多くなったといわれ大都市などでは転職をくり返すうちに非行化する例も見られます。

また先輩たちが生きてきた時代は皆さんの場合とは社会情勢が違っています。それらの点をよく考えながら、先輩たちの歩んだ転職の状況を見て下さい。

——先輩たちの70%は15年間に1回以上の転職を経験していました——

先輩たちのうち、この15年間に会社や工場をかわったり、家族従業者から雇用に変わったり、雇用人から自営業主になったり、無職になったり、その他転職をしたことが一度でもあると答えた人は70%で、15年間同じ会社や家業で働いていた人は30%でした。

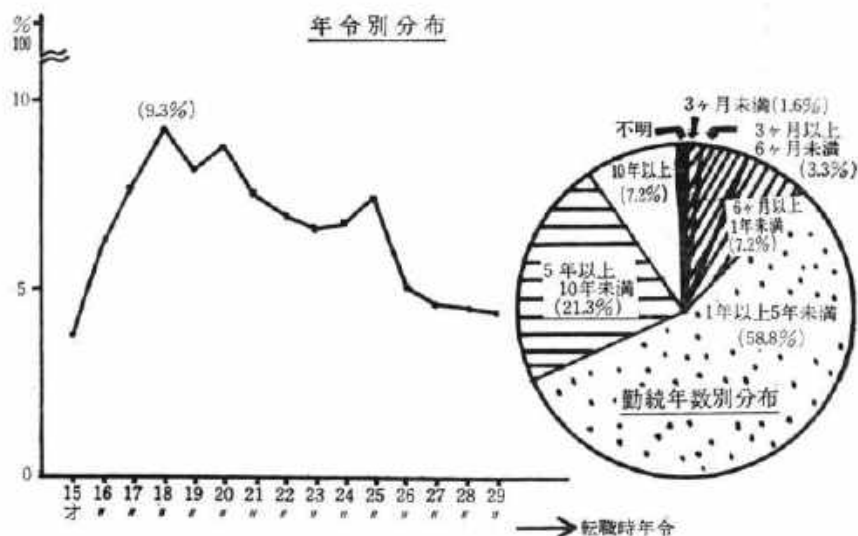
転職の回数は1回～4回までが大部分で、5回以上はごくわずかでした。女子にくらべて男子に転職経験のあるものが多く、その回数も多い傾向がみられました（第6図）。



第6図 転職経験の有無及び回数

——転職の最も多い時期は年令18歳と20歳、勤続年数1年以上5年未満でした——

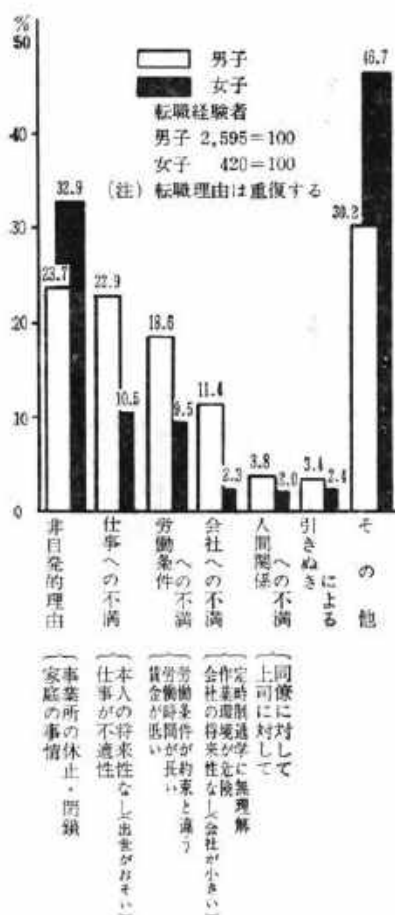
わりあい、沢山の人が転職したのは年令でいえば18歳と20歳で、勤続年数の点からみると、勤続1年以上5年未満でした。この時期をすぎると、転職した人はかなりへっています（第7図）。



第7図 転職の時期（転職経験の転職延数 3015=100）

——転職の理由は、男子は仕事に対する適性や本人の将来性、賃金に対する不満が多く、女子は家庭の事情が多くみられました——

転職理由は男女別にかなり違った傾向がみられ、男子は仕事に対する適性や本



第8図 転 職 の 理 由

10年経ってから役付になった人が多いようです(第9図)。

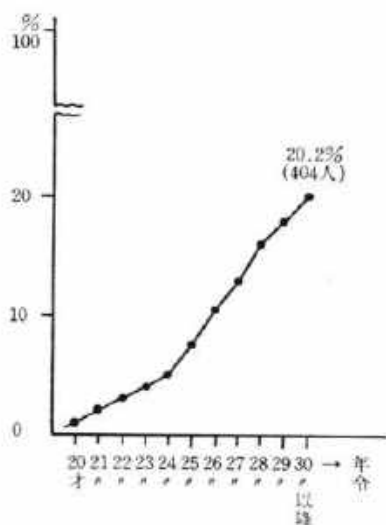
人の将来性(出世がおそい)など仕事に対する不満が転職理由となることが多く、ついで、労働条件への不満、なかでも賃金についての不満の多いことが目立っていました。女子の場合は、家庭の事情をあげた人が多くなっていました(第8図)。

(5) 昇進(役付)

職場の中での先輩たちの歩みを昇進という点からとらえてみると、もう役付になっている人が大分ありました。

中卒後15年の間に、役付になっていた人は男子の先輩の約23%、女子の約6%でした。初めてついた役職の名は、班長(77名)、主任(62名)、係長(47名)、班長補佐(24名)、組長(20名)などが多く、最初の役職が課長(13名)、工場長(11名)という人もありました。

はじめて役付になったときの年齢は28歳という人が一番多く、だいたい25歳を過ぎる頃、すなわち中卒後



第9図 役付就任率（役付就任者/調査対象者）

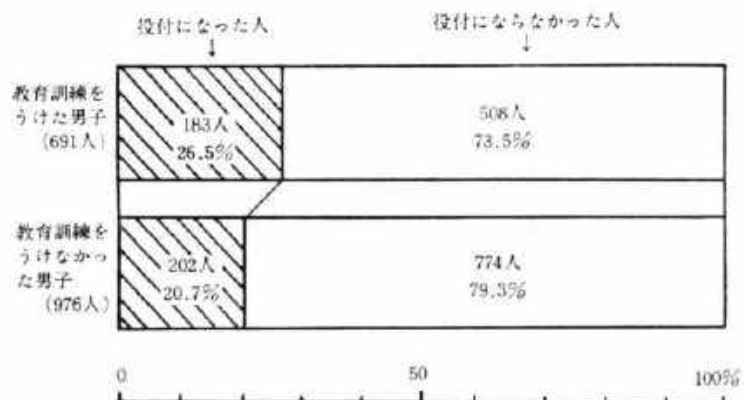
〔役付と教育、訓練〕

教育、訓練を受けた人と、受けなかった人とは役付になる割合にいくらか差があるようです。

男子においては、何らかの教育、訓練を受けた人では4人に1人の割合で役付になっていますが、受けなかった人ではこの割合が5人に1人です。しかし女子においては、とくに教育、訓練と役付の間に関連はみられませんでした。（まだ女子で役付になっている人が少なかったので、何ともいえませんが、今後女子の役付がふえるようになれば、男子と同じ傾向がでてくるかもしれません）（第10図）。

〔役付と転職〕

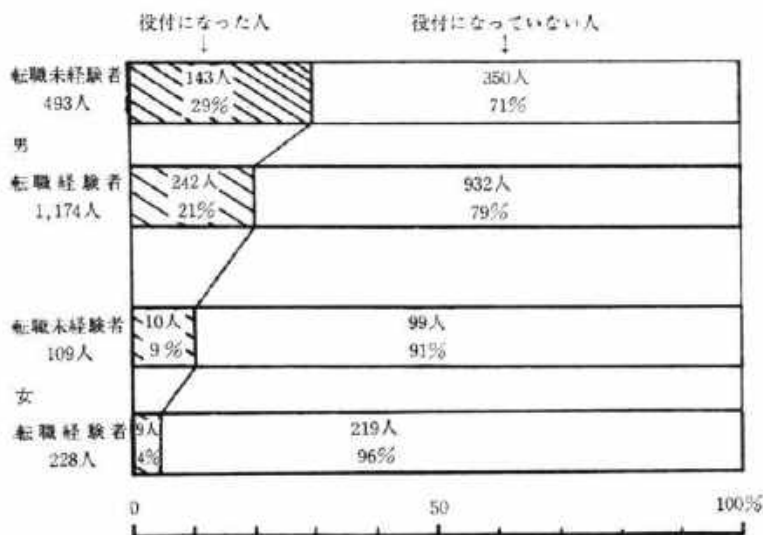
転職と役付との関連をみると、男女とも転職経験のない人のほうが役付になる



第10図 教育訓練と役付就任

割合が高くなっていました(第11図)。

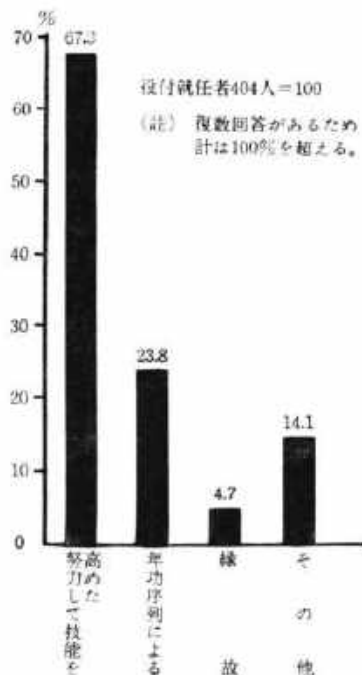
職場の中で地位を得るには、やはり一つの所に定着した方が有利なことが多いのでしょう。



第11図 転職と役付就任

〔役付になれたわけ〕

役付になった人に、「あなたが役付になった原因は何だと思うか」とたずねたところ、「努力して技能を高めたため」と答えた人が多く、「年功序列による」とか「縁故で」と答えた人は少数でした。つまり、役付になった先輩たちは、努力が報いられたと思っている人が多いわけです（第12図）。



第12図 役付になった原因

もちろんこれは、役付になった人自身の見方で、上司や周囲の人の見方はまた別かも知れません。しかし、先にみたように、受けた教育、訓練が仕事の上であるいは人間としての成長の上で効果があったと認める人が多かったこと、また事実、教育訓練を受けた人が受けなかった人よりも役付になる割合が高かったことを考えると、先輩たちの体験にもとづく実感が、何といても「実力がなければだめなんだ」というものであるのはうなずけるでしょう。

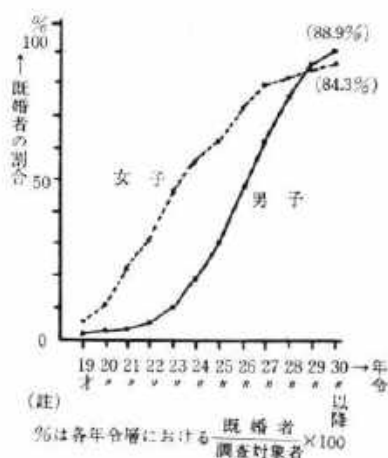
2 生活の変化

中卒後15年間というものは、少年期から青年期へ、さらに壮年期へと人生の中で最もめざましい成長の時期にあたり、職業のみならず、広く全生活領域においていろいろな変化が生じる時期にあたります。先輩たちのその間の生活の一端を知るものとして、結婚、持家及び自営業主としての独立の三点についてみてみましょう。

(1) 結 婚

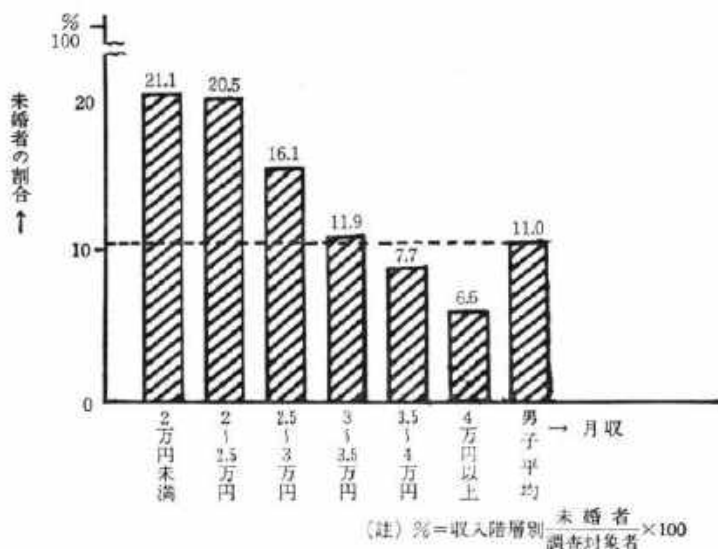
調査対象になった先輩たちの約90%は、中卒15年後——すなわち年令30～31歳——までに結婚していました。

結婚した年令は、男の人は20代後半、女の人は20代前半から半ばへかけてという人が多かったようです。昭和40年の人口動態統計調査によりますと、日本人の最初の結婚の年令は平均男27.2歳、女24.5歳ですから、先輩たちの結婚年令もだいたい平均的なものであったといえましょう(第13図)。



第13図 結婚の状況

男の人の場合は現在の収入が2万5千円より少ない層では、未婚者の割合が2割以上と高く、逆に4万円以上月収のある層では未婚者は7%を下まわっています（第14図）。

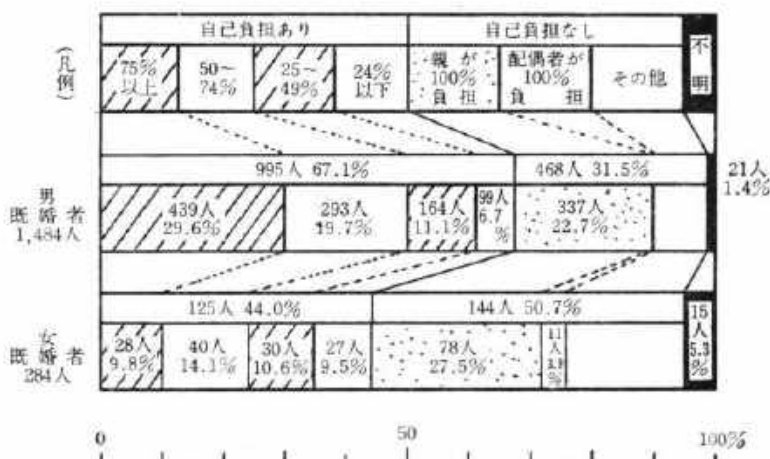


第14図 収入階層別未婚者の割合（男子）

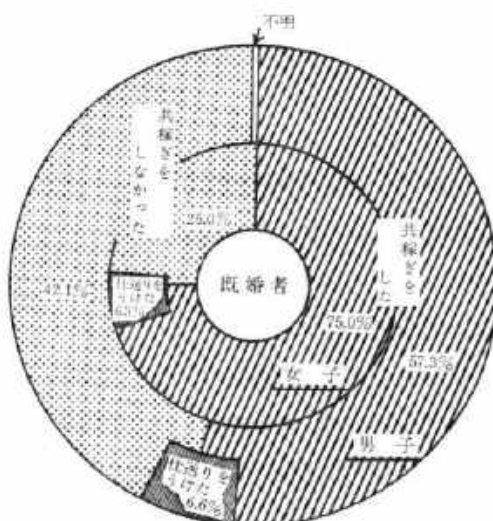
結婚に要した結婚資金（本人、親、配偶者の負担分、全てを合算したもの）は10万円以上50万円未満という人が過半数、次いで5万円以上10万円未満という人が多く、50万円を超える人は少数でした。

結婚資金をどの程度自分で負担したかをたずねたところ、いづらかでも自分で負担したと答えた人が男子約70%、女子約45%で、自分では全然負担しなかったと答えた人は男子約30%、女子約50%でした。自分で負担しなかった分は親が負担したという人が多く、親から全額だしてもらったという人も男子約20%、女子約30%ありました（第15図）。

最近では若い人の共稼ぎはごく常識的なものになりましたが、先輩たちの場合



第15図 結婚資金負担状況



第16図 結婚当時の生活状況

も結婚当時は共稼ぎをした人が多く、男子の約60%、女子の約75%は共稼ぎをしたと答えています。

親から仕送りをしてもらって生計をたてた人は男女とも非常に少なく、結婚当時から生活は夫婦二人で独立独歩の生活をはじめた人が多かったとみられます（第16図）。

（2）自分の家を持つ

先輩たちの3人に1人は自分の家を持っていました。

自分の家のある人の約半数は親から譲りうけた人で、残り半数が自分で資金を蓄えて購入した人でした。

自分の家を持った年齢は20代後半という人が多く、とくに自分で資金を調達したという人の場合は27～28歳という人が多くみられました（第17図）。

自分の家を持っている人は未婚者よりも既婚者に多く、また、収入との関連をみると、月収が2万円に満たない場合は目立って家のある人の割合は少なくなっていました。既婚者が未婚者にくらべて持家の所有率が高いことは、生活上の必要度が高いための当然の結果とも考えられますが、まえにみたように、結婚もまた収入によって左右されることが大きいことを考えると、家庭生活に及ぼす経済的条件の影響の大きいことが推しはかられます（第18図）。

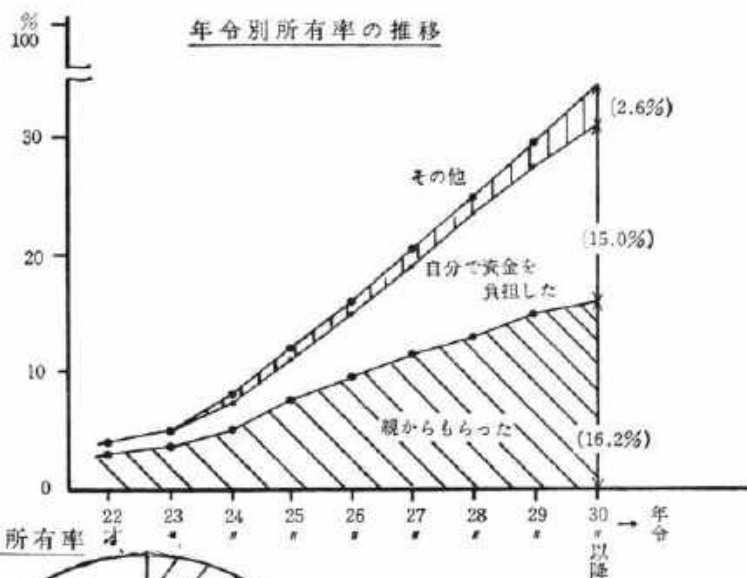
（3）自営への道

自営業主として独立することは中卒者にとって一つの大きな目標であり、中卒就職者の中でも将来独立することを目標に進学よりも就職の道を選ぶ人もみうけられます。

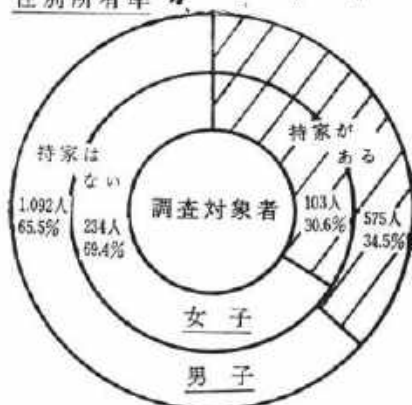
——中卒後15年間に、男子は7人に1人、女子は26人に1人が、自営業主となりました——

中卒時から自営業主であった人もわずかに（男子6名、女子1名）ありますが、15年後にはそれが男子249名、女子13名に増えました。その他、15年の間に一旦自営業主になったが再び雇用者になった人や家族従業者になった人を含める

持家所有率
↑

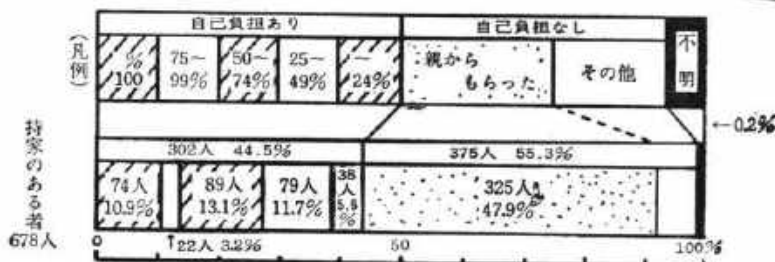


性別所有率

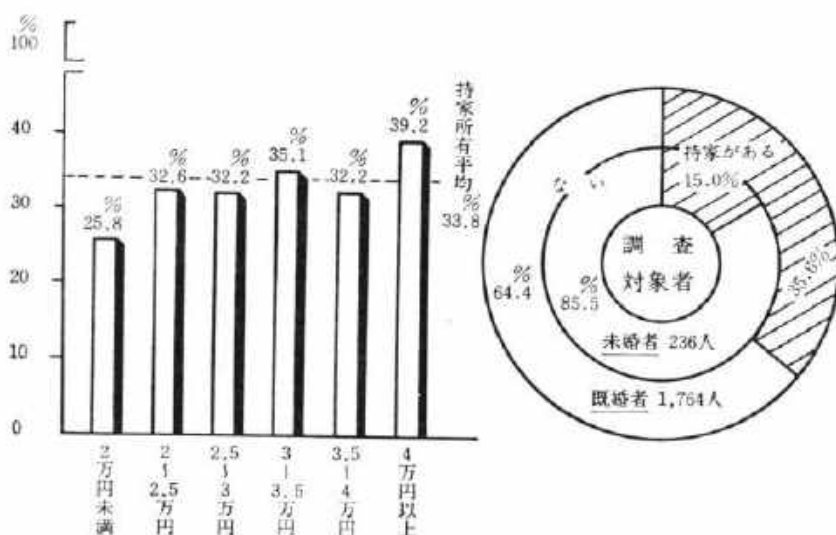


(註) 所有率 = $\frac{\text{所有者}}{\text{調査対象者}} \times 100$

持家取得資金の自己負担の有無



第17図 持家の所有状況



第18図 未既婚別、収入階層別持家所有状況

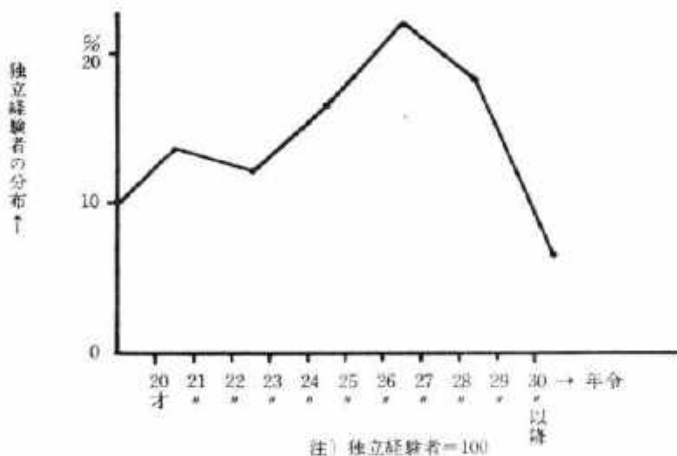
と、独立経験者は292名にのぼっています。

——独立した年齢は26～27歳という人が多い——

自営業主になった年齢は26～27歳という人が多く、役付になった年齢と同様に20代後半で独立した人が多くみられました。男の人の場合、結婚年齢や自分の家をもった年齢も20代後半が多かったことを考え合せますと、社会人として1人前とみられるようになるのは、少なくとも中卒後10年以上たってからあのことと思います(第19図)。

——独立の経路は、親から事業経営を譲りうけた人が独立者の約 $\frac{1}{3}$ 、自分で資金を調達して独立した人が約 $\frac{1}{2}$ でした——

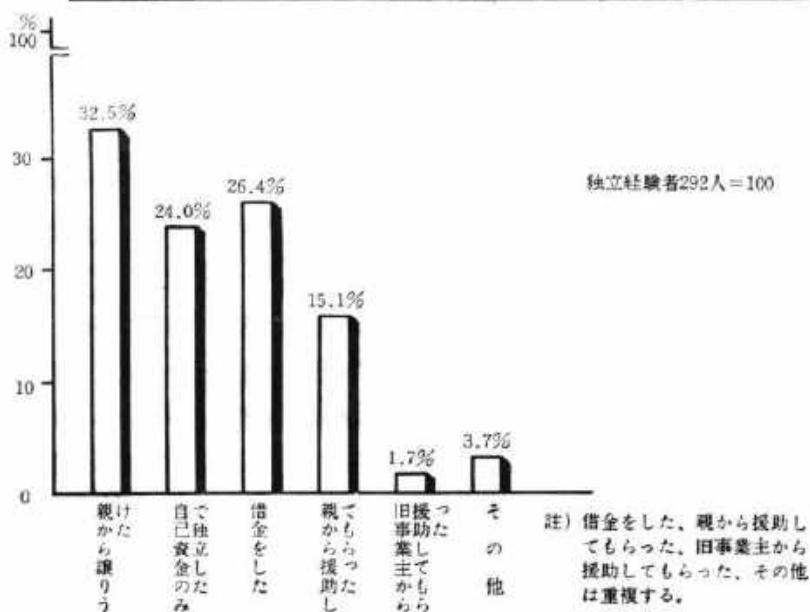
独立をなしとげた先輩たちの独立経路をみるとまるまる親から事業経営を譲りうけた人よりも、いくぶんかは本人の力によって独立した人の方が多くなっていました。また、旧事業主から独立に際して資金面での援助を得る例は非常に少なく、自分でまかないきれない分は親の援助や借金でまかになったという人が多かつ



第19図 独立経験者の独立年令

たようです。

なお、自力で独立した場合の独立資金の額は50万円未満という人が約70%、50万円以上100万円未満の人が約10%で、500万円以上はわずか2%でした（但し貨幣価値はここ数年の間に多少変動しています）（第20図）。



第20図 独立経験者の独立資金調達方法

3 事 例 紹 介

◎A君の場合

——働きながら学んで役付に——

A君が中学を卒業して就職したところは、中京地区にある労働者50人ぐらいの紙製品を扱う会社だった。事務員として入社してから現在まで15年間、同じ会社につとめ、その間に定時制の商業高校を卒業し、さらに夜間の大学の商科にすすみ、それも卒業した。計8年を働きながら学んだわけだ。この経験は、その後の仕事の上にも、また人間としての成長の上にも役にたったとA君は考えている。

A君のこういった努力が報われたのであろう。28歳で営業課長というポストについた。部下は7名。現在もひきつづきその職にいて月給も5万円になった。会社の方も発展し、入社した時の規模の3倍の従業員をもつようになっている。

結婚したのは29歳の時だから、比較的最近のことだ。その時30万円ほど費用がかかったが、7割は自分が用意し、残り3割を親に助けてもらった。住居は親と同居しており、共稼ぎはしなかった。

A君の場合、中学を卒業して以来ずっと同じ会社で働き、その間に高校、大学を卒業し、まじめにがんばったので、課長になれた。小さい会社に入ったのが、会社自体も大きくなった点は幸運だったと云えるが、A君自身の努力も見逃せないであろう。

◎Bさんの場合

——資格をとって准看護婦に——

Bさんは、田舎の中学を卒業してすぐ小さな医院へつとめた。事務員として7年間働いたが、その間に看護婦の仕事を見習い、准看護婦の資格をとる決心をした。そのための勉強をしながら働くため、病院（従業員250人）にかわり、准看



護学院で2年間の過程を修了し、望みどおり、准看護婦の資格を身につけた。現在も、その病院に准看護婦としてつとめ、月給も2万円をかなり上まわるようになっている。

准看護学院で勉強したことは、資格と直接つながっていたわけだが、それ以外にも人間としての成長の上に役にたったとBさんは思っている。

Bさんが結婚したのは、23歳の時だから、今の病院に移ってまもない頃である。結婚の時20万円ほどお金がかかったが、相手と半分ずつ出しあった。自分の方の分は親が8割、あとの2割を兄弟が出してくれた。結婚当時から現在まで准看護婦として病院につとめているから、その間共稼ぎというわけである。

すまいは、親（兄弟）の所に一緒に暮している。

Bさんの場合、はじめ医院につとめて働いているうちに、看護婦の資格をとるということにし、そのため働き場所を変え、2年間がんばって目的を果し、その後もその資格を生かして働きつづけているのである。

◎C君の場合

——技術を高めて現場の責任者に——

C君が中学を卒業してつとめたのは、従業員30人ばかりの、北関東にある小さな電気機械を作る工場だった。機械組立工として7年ほどそこで働いたが、会社が不安定で将来性がないように思われたので、転職にふみきり、現在の会社に移った。

現在のところは、従業員も1,400人と多く、給料等の労働条件も悪くない。仕事は電気通信機の組立工で、25歳の時、班長補という現場の責任者になり、20人ほどの部下をもった。今ではその上の班長になっている。給料も4万円をかなり上まわるようになった。役付になることができたのは、職場の中で努力して技能を高めたのが認められたとC君は考えている。学校その他の教育訓練は、時間がなかったので受けていない。

結婚をしたのは27歳の時で、費用は10万円ほどを両親に出してもらった。またその時に、60万円ほど出して家も手に入れた。(土地は借地。)その資金は6割ぐらい自分に用意があり、両親に4割ほど助けてもらった。共稼ぎはしなかったし、親から生活の援助をうけることもなかった。

現在、C君は職業、生活ともに落つき、通信機組立現場の班長として働いている。

◎Dさんの場合

——転職の経験——

Dさんは、今までずい分いろいろな仕事の経験をした。本当に苦労しているのである。はじめての仕事は子守りだった。賃金は安いし、労働時間は長く、それに子守という下積みの待遇にたえられず3カ月でやめ、卸売の店に家事女中で住みこんだ。そこで1年働いたが、家族が警察にあげられる事件があり、きまりが

悪いのでそこをやめ、小さな工場の織布工になった。2年続けたが給料が安く、父親がもっと金になる所へ行けというのでパチンコ屋の店員に住みこんだ。父親は働くのが嫌いで収入がなく、Dさんは父親に金を渡さなければならなかったのである。

パチンコ屋に半年、次につとめた旅館が2年、何れもくびになったのは恋愛事件のためであった。ふたたび織布工になって工場へ通っている時、結婚することになり、共稼ぎをつづけた。夫が外へ出て働くことをいやがったのでやめ、家で内職をしたが、苦勞する割に収入が少なかった。それでも5年ほど続けたがつらいのでやめ、飲食店のウェイトレスをしたり、また織布工になったりしたが、家庭の仕事ができないことや、夜も出なければいけないことなどあり職を変えた。

現在は、今までつとめた所よりかなり大きい食料品工場で働いている。住居はまだ間借りの状態である。

Dさんは家庭的にもめぐまれず、職場でもつらいことが多かったようである。現在は給料は安いが、落ついた職場を得た様子である。

◎E君の場合

——バス運転手をしながら家を建てる——

E君は家が北陸地方の農家だったので、中学を終えて3年間は、家で農業の仕事をしていた。その間定時制高校へ通って勉強していたが、家庭の事情で外へ出て働くことになり小さな建設会社に雇われ、トラックの助手をしている間に自動車の運転をおぼえた。運転免許をとって、タクシー会社につとめ、運転手になったが、従業員10人そこそこの小さな会社で、不安定で将来性がないので、そこをやめ、今度は大きなバス会社に入り、バスの運転手になり、現在まで7年間つづけている。今の会社は従業員が5,000人近く、給料も45,000円近くもらって安定している。

定時制高校は結局、3年で中退したが、仕事の上でも、人間としての成長の上



でも、まあ多少ためになったようにE君は感じている。

結婚したのは、今の会社に入り4年たって、27歳の時であった。その時の費用の分担は、親が1割、自分が2割、相手が7割というような程度だった。共稼ぎをしながら、家をたてる計画を実現した。

家をもったのはごく最近のことだ。土地つきで130万ほどだったが、2割たらずは自分達が用意したが、残りは借金だったから、その調達には苦勞した。

E君は、多分計画性のある人なのだろう。トラックの上乗りをしながら、運転免許をとることを考え、それをとったら、大きな会社へ入ることを考え、結婚したら共稼ぎをして家を持つことを考え、最近それをも実現した。生活設計がきつと上手なのではないだろうか。

◎Fさんの場合

——美容師見習から美容院経営へ——

Fさんは、九州の中学を卒業してすぐ、町の大きな美容院につとめた。6年間



その店でまじめに仕事をおぼえた。その間に美容学校へ1年通って卒業し、美容師の資格もとった。20歳になった時、店でも古参になり、「おねえさん」とよばれる主任のような地位につき、6人の若い人達を監督することになった。この6年間は辛いことも多かったが、どんなことでも完全にやりとげるといふ心がけをもって仕事をやりとおした。

21歳のとき、独立して小さな美容院を自分でもつことにした。このために資金を50万円ほど、高利貸、銀行、親戚などから借金をしたが、それだけの信用を得るのが大変だった。しかし自分の店をもてば、収入は多く、やり甲斐もある。

結婚したのは店をもつてしばらくたった、23歳の時だった。費用は40万円ほどかかり、配偶者と半々ぐらいで用意し、自分の分は8割ぐらい親が出してくれた。以来ずっと共かせぎである。子供もあるが、まだ居間付きの店を借りており、自分の家をもつに至っていないが将来は自分の家を建てようと考えている。

Fさんは、見習い時代から仕事熱心に、きちんと技術を身につけ、他人の信用も得るよう努力したので自分の店を持つことができた。収入も6万円というから

30歳の女性の水準をこえている。Fさん自身、この職業は、自宅で子供のそばで働くことができ、技術は一生自分からはなれることはなく、非常に良い選択だったと満足しているようである。

◎G君の場合

——材木販売店員から独立——

G君が東京近郊の中学を出て就職したのは、材木問屋だった。そこで13年間がらばって働いた。その間に商品についての知識をはじめ、商売のやり方をおぼえた。いつまでも人に使われていたくないと思っていたので、そのつもりで資金もため、信用を得ることにむつとめた。

27歳の時、親が将来店をもつ時のことを考えて、時価150万円ほどの土地を買ってくれたので、1年後材木を安く手に入れて家をたて、自分の店をもつ準備をととのえた。材木店で同じ所に10年以上つとめると、材木市場に出入する資格が得られ、主人に代って店の責任も持たされきりもりしていたので、独立してやってゆく自信もできた。

28歳の時に独立。結婚も同じ年にした。費用は両方ともG君自身で用意した。結婚の方は大した費用ではなく(約15万円)、家もあったので困らなかったが、材木販売の店を出す方は300万円近く資本がいり、その調達は大変だった。また取引先もそれまでの大きな企業でなくなったので勝手が違い苦勞した。従業員が10人以上いた所へつとめていたのが、何から何まで自分でやる自分の店は、まったく大へんなもので、こんなに骨が折れるのかとびっくりしたほどだが、将来の見通しは明るく、発展が期待できる。現在従業員を1人雇い、純益も5万円程度はあがっている。

◎H君の場合

——故郷に帰って自動車修理工に——

H君は東北の中学を卒業してすぐ、小さなパン菓子屋に雇われ、パンやお菓子



を売る仕事をした。3カ月ほどそこで働いたが、都会へ出てみたくて仕方がなかった。そんな時、東京で板金業を営んでいる親せきの所から、働きに来ないかとさそわれ、その気になって上京した。板金工の見習いを1年あまりしたが、小さな工場（労働者4人）で、経営も苦しいのか、最初云われた労働条件は守られず、三食支給で時々小遣い程度をくれる以外は給料もはらってくれなかった。

約束が違うのでそこをやめ、故郷に帰って自動車修理工になり、現在までつづけている。勤務先は自動車販売修理の会社で労働者は60人ほど、給料は27,000円もらっている。

パン菓子屋にいた時、定時制高校に入ったが、上京するために3カ月中退した。短期間だったから、何の役にもならなかった。東京での経験は、結果的には失敗だったけれど、人生の経験をひろげる意味では良かったようだ。現在の仕事が地味で給料も良くないのに満足してうちこめるのも、前の経験から学んだせいだと、H君は思っている。

結婚をしたのは26歳の時。資金は6万円、それまで給料は全部親にわたし、親が結婚の準備をしてしてくれたので、自分は全然出さなかった。結婚後も両親と一緒に暮し、共稼ぎをした。

H君の場合は、あこがれて出た東京の生活は、うまくいかなかったのだが、その経験を生かし、現在はおちついて仕事にはげんでいる。

働く若人の将来。

青少年の職業生活設計のために

昭和42年12月

編集発行 労働省婦人少年局

(TEL 211-7451)

